豊臣秀吉（一）

―異本太閤記―

山岡荘八

豊臣秀吉(一)
山岡荘八
© Wakako Fujino 1977

講談社文庫
定価440円

昭和52年12月15日第1刷発行
昭和58年11月20日第15刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国オフセット株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-131431-9 (1)

講談社文庫

豊臣秀吉 (一)

異本太閤記

山岡荘八

講談社

枕ことば

山岡荘八

秀吉ほど歴史の中にいながら、歴史から喰みだしてしまっている人物はちょっと類例がない。田中吉政の家臣川角三郎兵衛の書いた「川角太閤記」、前田家の侍臣小瀬甫庵の書いた「甫庵太閤記」、林羅山の「豊臣秀吉譜」、それに、「太閤真顕記」から「真書太閤記」「絵入太閤記」「絵本太閤記」とあり、この文化年間に出た「絵本太閤記」などは、その筋から絶版を命じられたりしている。

この他に秀吉の素性をせんさくした「太閤素性記」があり、秀吉の祐筆だった大村由巳の記録などたくさんあるのだが、実のところは、出生からしてハッキリしない。尾張中村の百姓の子から皇室のご落胤説まで、まことに絢爛たる伝説的大人物と云うべきであろう。

そもそも日吉丸が矢作橋の上に寝ていて蜂須賀小六と出会う、あの、出会いのくだりまでが嘘らしい。というのは当時矢作川には橋はかかっていなかったと渡辺世祐博士が考証している。

したがって、秀吉自身、幼年期から青年期の出来ごとを、仮りに自分自身で述べたとしても、実は、どこまでが宣伝で、どこまでが真実かわからなくなっていたのではあるまいか。秀吉の性格にはそうした底抜けの陽性が感じられる。

その時々に有ること無いことつきまぜて大きなホラを吹きまくったに違いないと思えるからだ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

皇胤説になると、彼の母は萩中納言保廉（やすかど）の息女で、この息女が宮中に仕えている時に主上のお手がついたことになる。むろんそんな中納言は公卿の中には存在しないというのだから念が入っていておもしろい。

そう云う人物なればこそ、矢田挿雲も書いたし、吉川英治も書いたし、川口松太郎、坂口安吾、海音寺潮五郎と書いて来て、テレビ、映画、講談、浪花節、と、どこの世界へも入りこんでさっさと寵児になり得るのである。

むろん現代だけではなくて、江戸時代から庶民の中にデンと胡坐をかいて貧乏ゆるぎもしていない。まさに永遠の大英雄である。そこで私もこの英雄をとりあげた。歴史的な考証などはひと先ず措いて、祖父の「太閤さま話」から、われわれの内部に棲んでいる日吉丸、藤吉郎とそのあとを追いかけてみるのである。

私の「小説徳川家康」と、この「異本太閤記」とは全く異質のものだと思って頂きたい。これは時に作者が太閤さまとホラ比べをしてゆく諷刺小説でありユーモア小説でもある。むろんまるきり史実を無視したというのではない。が、とにかく暇なおりに退屈させないようにというのが狙いで、版元にお願いして特に定価も安くして貰った。

もし読み飽きるようなことがあったら、そのまま枕にして眠って貰って一向に差支えない。眠られてもよいから側（かたわ）らにおかせて貰いたい……というのが、この本の作者の、偽りのない執念であり希いなのである。では呉々もお目を大切に……

豊臣秀吉(一)

―異本太閤記―

哀しい流民

天文十三年十二月半ばに、またしても尾州愛智郡の中村郷から稲葉地、東宿の一帯に、流民の一団が流れこんで暴行を働いた。

折悪しくこのあたりの領主、織田弾正忠信秀が、洗いざらい男どもをかり立てて、美濃へ攻めこんでいる留守だったので、どこの村にも屈強な男手はなく、流民は思うままに村々を荒しまわった。

東宿にはもともと傭兵稼業の萱津勘次長晴が蟠居していたので、これが百三十近い乾分を引きつれ、美濃へ出稼ぎにいっていなかったら、充分流民と対抗出来たのだが、男手がないのでは話にならない。

流民は約七十余名。それが西から木曽川のデルタを超えて飢饉年の蝗(いなご)のむれのように雪崩れこんでくると、直ちに三隊に分れて宿営し、それから容赦ない奪略にとりかかった。

一隊は中村の庄屋甚左衛門の家を占拠し、一隊は稲葉地の正円寺を、そして、更にもう一隊は、皮肉なことに、海部郡の蜂須賀小六と並び称される、乱破(らっぱ)（野武士）の大親分、前記の萱津

勘次長晴の留守屋敷を占領して泊ったのだから恐れ入った。

むろんどこから流れて来て、どこを眼ざしてゆく暴民なのかは誰も知らない。

応仁の乱この方百年もつづいている戦乱なのだ。西国、中国、四国あたりの百姓たちは、耕しては奪られ、建てては焼かれる生活に絶望、すっかり働く意欲をなくして、東へ、東へと故郷を捨てて流れて来るのだそうな。

流民は三つに分宿すると、続いてそれ等の家へ、荒くれどもの手で続々と戦利品を運びこみだした。

米、味噌のたぐいから衣類、武器、野菜、布団などはまだいいとして、ある家からは娘が担ぎ出され、或る家からは馬が曳き出された。

中にはもの珍しそうに苧桶をかぶって横なぐりの師走の風の中を戻って来るものがあるかと思うと、念仏の置鉦を奪って来て、

「――ナンマイダ、ナンマイダ」

と、あぜ道を道化て踊りながら戻って来るものもあった。

「――おい、それはいったい何の真似だや」

「――これか。これはな、娘だと思うて抱いた女子が婆さんだったゆえ、腹を立てて締めて来た、その供養だ」

「――又婆さまに当ったのか。よくよく後生のわるい男だ」

戦争が百年続くと、自暴自棄の民も二世三世の世代になる。第一世にこの有様を見せたら、恐らくこの世の終りが来たといって気が狂って了うに違いない。

が、生れた時から、こうした世界を見せつけられて来ている二世三世になると、平和だの、道徳だの、自由だの美だのというものには、お目にかかったことがないのだから「良心」などはありようがない。

人間の感受性は時に素晴らしい文化も創造する代りに、いつでもすすんで動物に還元もする、鋭敏な一面を持っている。

それに破壊は創造よりも遙かに労力を要せず、しかも喜びは創造以上に大きい場合がしばしばあった。

ここは三隊のうちで最も乱暴者が多く集ったかと思われる東宿の親分、勘次長晴の屋敷内であった。

「――おい、すっかり日が暮れたぞ。景気よく焚火を始めろ」

鉦を叩きながら戻った男が、大声でわめくと、どこからかどぶろくを見つけ出して来て、縁側で飲んでいた男が、

「――それならば、おれに任せ」

と、鷹揚にあとを引取った。

「――人間はな、生きているうちに頭を使わねばならぬものだ」

「――こいつがこいつが、又要領よく酒を喰って、大ボラを吹きおるぞ」

「――いやいやさにあらず。すでに眼ぼしい女どもはな、奥に五、六人さらって来てある。よいか、この上はもっとも手数の省ける手段で、腹をふくらし、暖をとり、それからあたりを明るくすることだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「――それゆえ焚火を始めろといったのだ」
「――分っているて！」
と、酔った男はまた大形に手を振った。
「――おれなどは、ここでもう、ちゃんと小姓まで見つけ出してな、すべての支度はしてあるのだ。見ていろ。よいか、おいそこの小童、出て来いや」
そういうと、これはまた乱世の所産の第三世ともいうべき二人の童が、この家の主人勘次自慢の高野槇の古木のかげから眼を光らして姿を現わした。
一人は十一、二歳、もう一人はそれより、二つ三つ年下らしい。どちらもいま、燃え立つような好奇心をもって、白くもなれば黒くも染る年頃の男の子であった。
むろんこれは流民がつれて渡って来たものではない。新しく村へ入って来るものなら飴売りのあとでも、乞食祭文のあとでもひねもす離れずについて歩いて、そこからつねに明日の人生を発見してゆく、どん欲で、正直で、冒険好きで感心ぐせの強い、この近辺の人間どものあととりなのだ。
「おいわっぱ、さっき相談してあったな、あれにはやく火をつけろや」
「うん」
と、年上の、ずんぐり肥えた方が、くるくる眼玉をうごかしてうなずいた。
「火をつけて、あとで、萱津の大将さまに叱られても知んねえぞ」
「おお引受けた。早くつけろ」
「よし来た。日吉、来い」

と、そのわっぱは、もう一人の、年下の方をうながして、庭の中央へ飛んでいった。
年下の少年は、背に弟か妹か、性別のはっきりしないボロを身につけた赤ン坊を負うている。もう十二月の半ばで、寒気のはげしい日暮れなのだ。この流民さわぎで、家では親たちが心配して待っているのだろうが、そんなことなど忘れてしまって、すっかり好奇心のとりこになっている顔つきだった。
やがて、萱津の勘次長晴親分の城廓が一角からボーッと明るくなり、パチパチと火のはぜる音が聞えだした……

憎めぬ悪魔

恐らく平和な世の中しか知らない人間がこれを見たら、悪魔と罵り、外道とわめいて、呪詛のかぎりを尽すであろう。
この屋敷の主、萱津の勘次長晴は、もともと戦争の人入れ稼業だ。それだけに、屋敷の作りは小さな砦をなしている。
周囲には濠をめぐらし、入口には厳重な柵門を構え、屋敷のまわりは乾分を入れる長屋でかこって、中庭のまん中に米蔵と厩を作ってあった。
世間的な呼び方をすれば、彼もまた清和源氏の流れを汲み代々尾張の守護、斯波氏に仕えて来たこの土地の豪族。
だが、斯波氏があってないに等しい現在、別の言葉で云えば、乱破の大将であり、山賊の親方

であり、傭兵業の経営者だ。したがって、こうした妙な構えの屋敷に住むのも、自衛の必要から当然のことであったが、それにしても、二人の子供がやって来て火を放った厩の有様はまた何としたことであろうか。

使える馬はみな勘次長晴が、こんどの戦に雇われて、美濃へ曳出していったので、厩の中にはいつ産気づくか分らぬ牝馬が一頭残されていたのだが、悲しい闖入者どもは、その牝馬をがんじがらめにし、逃げないように繋いでおいて厩ぐるみ火をつけさせたのだ。

縁側で、例の酔った男が得意そうにわめいている。

「ハハ……どうだ。わかったかいおれのコンタンが。ああして、あそこに火をつければ、屋敷中は真昼のように明るくなるし、第一ぽかぽかとあったけえ。いや、それだけならばまだ自慢するほどのものはねえが、あの火でこんがり馬の丸焼きが出来上り、みんな味噌を持っていって焼き馬を千切って食えば、別におかず作りの手数はいらねえ。これが一挙三得つまりはおれ流の軍学だ。ワッハッハッハッハ」

まさに男の云うとおりであった。

屋敷の中は明るくなると同時に温くなり、そしてがんじがらめの牝馬はそのまま火焙りにあって焼けてゆくのである。

何がおそろしいといって、乱世の暴民の悪を悪とも思わぬ乱暴ほど恐ろしいものはない。

それは昨日より今日、今日より明日と、果てしなく破壊度の進展をもたらし、ついには人間すべてを悪鬼に変型させてゆく。

ここに集った連中とて、一人々々は決してさしたる悪人ではあるまい。むしろ、こうしなけれ

ば生きるすべのない哀れな犠牲者の群なのだといえないこともないのだが、同時にすでに人情からは遠く離された衝動の動物になり下っていることも又事実であった。いや、恐ろしいのはこの大人たちだけではない。

例の酔った男に云いつけられて厩に火を点けたのは、ずんぐりとした年上のわっぱであったが、彼はすでにたてがみに火のついた馬を見て、

「おい日吉、人間もこうして焼いて、味噌をつけたらお菜になンべかな」

まるい眸にギラギラとまっ赤な焔をうつして、年下のわっぱに云った。

日吉と呼ばれた方は、背の赤ン坊をゆすりあげながら、神妙に首をかしげて、

「おら、人間は食いたかねえ」

「なら、この馬も食わねえのけ。あの赤面のおじは、おらにもよく焼けたところを喰わせてやる。山鳥や兎よりはずんと美味いと云ってたゾ」

「ふーむ」

「ああ馬の畜生、暴れる暴れる。あッ縄がきれて立上ったゾ。ませにぶつかったゾ。あ、眼が光っている。羽目板を蹴とばした……」

年上のわっぱはそのたびに、自分でもぴょんぴょんと跳ねながらわめいてゆく。

だんだんあたりは暗くなって、焔の舌が赤さを増した。その照り返しでわっぱどもの顔もまた地獄絵の中の小悪魔そのままに見えてくる。

ついに馬は悲しいいなきを残して、どっと倒れた。同時に、火のまわりへ集って来ていた大人どもは、ワーッと歓声をあげてパチパチと手を叩いた。

破壊の極致は殺戮にあるのだろうか。それに、燃え狂う焔の渦は、いやが上にも軌道を失ったこの暴民たちをあさましい昂奮に陥れてゆくのである。

「それッ、火勢を弱めるな。薪をどんどん抛りこめ」

「おい来た。こりゃ冬はどっかへケシ飛んで、まるで夏が来たほどにあったけえや」

「なるほど一挙三得とはよく云ったゾ」

口々に何か喚きながら、四方から戸障子やら飼料桶やら、農具やら、薪やら、手当り次第に投げこんだ。

いずれも、ここへは一泊か二泊かするだけの渡り蝗……

ずっと東の、関東か奥州へ流れてゆけば、どっかに住みよい土地があるであろうと、漠然とした夢を追って故郷を捨てて来た流民の群には、他人の財物には嫉視はあっても惜しみはなかった……

それに彼等を鎮圧する筈の武力は、仲間喧嘩にいそがしく治安のためには全然無力な乱世なのだから、いよいよ軌道をはずれてゆく……

戦国三世

「さ、よく焼けたぞわっぱども。お前らも勝手にむしってたらふく喰え。それッ」

この陰険な一挙三得の発案者は、どこからか長い打刀を持出して来て、馬の股をえぐって二人の子供の方へ抛った。

「日吉、喰おう」
年かさの童は待ちかねていたように大人の中へあぐらをかいた。
「お前のおなかもグウグウ鳴っている。味噌はおれが取って来た。それ……」
しかし日吉と呼ばれた童は、まだ目をまん丸く開いたまま息をつめて、その場の情景を眺めている。
全くそれは、見ようと願ってたやすく見られる風景ではなかった。五百坪ほどある庭の中央で、厩ひとつ焼きはらいその庭土に半円を描いて座った流民の姿は、これがこの世の人間かと改めて首を傾げたくなるほど人間ばなれのした奇妙な風体だった。
一つ二つと数えてみると二十七人いる。
それが女の着物を着ている者があるかと思うと、陣羽織を着ている者があり、野良着を奪って着ているものがあるかと思うと、紋付を持出して着込んでいるものがある。
どこからか置鉦を盗んで来た例の男は、こんどは、この屋敷で輪袈裟を見つけ出し、鹿爪らしくそれを首にかけて、時々チンと叩きながら、
「ナム馬頭観世音、おらが腹の中で成仏せよや。ナンマイダ、ナンマイダ……」
おどけた手ぶりで、いちど切って来た馬の肉に塩をふりかけ串にさしては焼き直している。
その右わきの男は、わざわざ裸になり、着物を前膝にかけて背中あぶりをしながら馬肉を頬ばっていたし、その隣りの男は、薬鑵を持出して来て、せっせとどぶろくの燗をしだしている。
誰も彼もが、フウフウ吹きながら馬の肉をむさぼり喰う点では一致していたが、主食はめいめいが別々だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com